

XenosagaI・II - 第十二話 家族 - Familie - 上

アレン：――主任、もう心配いりませんよ。KOS-MOS は二局へ運ばれました。

きっとミユキちゃんが、上手くやってくれるはずです。

シオン：う、うん、そうね。後はまかせておけば――

（――本当に、それでいいの？）

アレン：Jr. くんたちは庁舎に向かっちゃいましたし、僕たちは、どうしましょう。

よ、よかったら、この後――

シオン：アレンくん、二局への申し渡し、これからよね。

アレン：え、ええ、でもあれは別に、そんな急ぐものじゃ――

シオン：二局へ行きます。アレンくんは、休暇に入っているわよ。

アレン：ええっ！ ちょ、ちょっと待ってくださいよ！

主任、なんだって直接出向いて引き継ぐ必要があるんですか？

シオン：レポートまとめるより、口頭の方がはやいでしょ。

アレン：――にしたって、U.N.N. 上でもいいわけですし――ちょ、ちょっと待ってくださいってば！

家 - Familie - 族

シオン：――プロジェクトゾハル？

ヴェクター研究員：ええ、加速度的にその広がりを見せるグノーシス現象――最新の予測では、最悪の場合、数年のうちに全人類は、グノーシスの干渉によって滅んでしまうという結果が出ています。すでに 120 以上の太陽系圏が消滅している。

公になっていないだけで、その実態は逼迫しているんですよ。

シオン：状況は理解しています。ですが、何故――

KOS-MOS がそのプロジェクトに移管されることになるのです？

ヴェクター研究員：これをご覧ください。

シオン：（！！ これは――！）

ミュキ：うわぁ、すごいですね――！

ヴェクター研究員：KOS-MOS・第三種兵装――これから換装する筐体に、いずれ搭載される予定です。

起こりうる最悪の事態を未然に防ぐ目的で、建造されているものです。

シオン：（間違いない、これは――エンセフェロンでネビリムが見せてくれた、あの――

ウ・ドゥとの激突――もう近い未来まで迫っているというの？）

アレン：あの、なんなんですか？ その最悪の事態って――

ヴェクター研究員：ウ・ドゥと呼ばれる現象を、ご存じですか？

シオン：（――――！）

ミュキ：聞いたことがあるような――なんでしたっけ？

ヴェクター研究員：プロジェクトゾハルは、グノーシスをこの宇宙から一掃する目的で推進されている、一大計画です。

そのためには、ミルチアに今現在も眠り続けるオリジナルゾハルをサルベージしなくてはならない。

オリジナルゾハルは、この次元宇宙最高のエネルギー機関として、研究されていたものですからね。

しかし、そのシステムの中核――ゾハルを制御するためのコアユニットは、諸刃の剣なんです。

シオン：諸刃の剣――

ヴェクター研究員：それが、ウ・ドゥです。

コアユニットの暴走という初期事象が判明している以外、詳細はまったく不明。

ウ・ドゥの影響でミルチア宙域は今のような姿になってしまった。なにより忘れてはならないのは――

グノーシスはこの現象に呼応する形で発生した――ということです。

アレン：ま、まさか――新たなグノーシスが出現するとでもいうんですか！

ヴェクター研究員：――それは断定できません。しかし、十分あり得る話だと思いますよ。

ウ・ドゥが存在する以上、グノーシスを排除するためのプロジェクトゾハルには、

さらなるグノーシスを招きかねないという危険性が、常に含まれているのです。

シオン：それで KOS-MOS をプロジェクトゾハルに移管させて、こんなものを――

両肩のユニット――相転移システムですよ。

ヴェクター研究員：元はアーキタイプ用として建造されていたものですが、現在の KOS-MOS 用に、

再調整が施されています。システム半径は 130nm になります。

アレン：130nm！

シオン：制御できるんですか、そんなスケールのものを？

ヴェクター研究員：二局[うち]と戦技研で制御させますよ。

そのために KOS-MOS を、ここに移送してきてもらったんですから。

ミュキ：ええ、任せてください、ウヅキ先輩！

KOS-MOS――万全の状態に仕上げてみせます！

ヴェクター研究員：残念ですが、イツミ技官――あなたには新しい辞令が届いています。
至急、曙光へ帰還していただけますかな？

ミュキ：そんな――

シオン：それは、本社の決定ですか？

ヴェクター研究員：――もちろん 辞令をご覧になりますか？
もっとも、一局の主任に、二局の内部人事についてご意見いただく必要はありませんが。

ミュキ：先輩――

シオン：――

いえ、それには及びません。

ヴェクター研究員：KOS-MOS 起動の経緯からいろいろとご不安なのは分かりますが――
なに、大丈夫ですよ。
これまでの KOS-MOS の活動記録からも、それが遂行できると本社は考えていますし、
それは我々も同様です。準備も万全に整えてあります。

シオン：信頼するしかないんですね。

ヴェクター研究員：できるはずですよ。なにより、この第三種兵装を設計したのは――
一局にいらっしゃったケビン・ウィニコットさんですから。

シオン：――！

――わかりました。

本日 1400 をもって、第二開発局に KOS-MOS を移管いたします。

書類は後送しますので、必要事項記入の上、一局の私宛にご返送ください。

ソフトウェアの引継ぎは彼にやってもらいますので、不明なことがあれば――

ヴェクター研究員：――ないと思いますよ。ご苦労さまでした。

シオン：――それでは。

アレン：あ、主任！

ミュキ：先輩――！

――

シオン：人々を救うため――ですか？

ケビン：そう、KOS-MOS[彼女]は、そのために生まれてきたと言ってもいい。

彼女の目醒めは、人々を未来へと導いてくれる――その日が待ち遠しいんだ、僕は。

こんなことを言うと笑われるかも知れないけど、僕は信じてる。

――いや、信じたいんだ。

彼女はたしかに巨大な力を持ってる。でも、それはただの兵器として、破壊するためだけの能力じゃない。

殺戮も悲劇もない理想の世界を実現するため、古い価値観を一掃するための能力なんだ、と――

シオン：ふふ――

ケビン： やっぱりーおかしいかい？

シオン： いいえーただ、なんて言うかー

そうー子供みたいに純真な目をしていたから、ケビン先輩ー

ケビン： 君とこういう話ができるのが、つい嬉しくてね。

ー公試のときは気をつけよう。

シオン： でも、私も早く見たいです。KOS-MOSが目醒めた姿をー

ミュキ： すみません、私ー先輩のお手伝いができると思って、降りてきたのにー

シオン： あなたのせいじゃないわよ。

アレン： それにしても、なんだか含みある態度でしたよねえ。

シオン： ねえ、アレンくんー

KOS-MOSの深層領域記録を連邦政府に提出した件、本社から連絡来た？

アレン： あ、さっき来ました来ました！ いやあ、感動しましたー

減給は覚悟の上だったのに、なんのお咎めもなしですからね！ やっぱり、あれですかー

ファウンデーションを救うための行為だったってことが大きかったんですかね。

人道的な裁きっていうか、いやあ、本社も粋なことしてくれますよねえー

シオン： （そんなんじゃないわー本来なら、減給どころか懲戒ものだもの

どこかで、ううん、ヴェクターの中になにか、大きな意志を感じるー）

ミュキ： ー先輩？ 急に考えこんじゃって、どうしたんですか？

シオン： ううん、なんでもない。

アレン： あれ、どこか行かれるんですか？ あ、あの、どちらへー？

シオン： ちょっと街まで行ってくる。久しぶりだからー

アレン： 久しぶりってー

ああ、そうか。主任の実家ってたしかー

シオン： そう、ここの八区。

ーねえ、アレンくん。KOS-MOS、目を離さないでいてーね。

アレン： え、ええ、そりゃあ、まあー

って、なんですか？

シオン： ー

アレン： やっぱ変だ、今日の主任――

ミュキ： 変です――ねえ。

――

シオン： ――さて、と。いまは気にしすぎたってしょうがないわね。

街でもブラブラして気分転換しよっかな。

シオン： 『モビィ・ディックカフェ』？ ここって、ひょっとして――

モビィ・ディックカフェ

シオン： やっぱりそうだ――

――マスター！

マスター： ――うん？

シオン： ふふっ――

ども。

マスター： おや！ 誰かと思えば、シオンちゃんじゃないか

ずいぶん会わないうちに女っぽくなったねえ。ハイスクール以来？

シオン： ふふっ――ですね。ご無沙汰してました。こっちに引っ越されたんですか？

マスター： 再開発の波には勝てなくてねえ――

ま、でも、せめて店の中くらいはと思って、内装はそのままに。

シオン： ――うん、モビィ・ディックはやっぱりこうでなくっちゃ。

マスター： まあ、かけて。いつものでいい？

シオン： ええ、あと――おなか空いちゃったからそっちの方も。

マスター： 了解。――ところで、今日は休暇？

シオン： だといいんですけどね。残念ながら仕事――ここの二局に用事があって。

マスター： そうか、ヴェクターだったよね。お兄さんから伺ってるよ。

シオン： え――兄さん、来るんですか？

マスター： うん、ちょくちょく。――なに、まだ会ってないの？

せっかく帰ってきたんだ。顔ぐらい出した方がいいんじゃないの？

シオン： マスターまでそんな――私が兄さん苦手なの知ってるくせに。

マスター：お！ 噂をすれば――

シオン：えっ！

庁舎

ガイナン：――来訪が遅れてしまい、恐縮だ。先の E.S. 来襲時には、たいして役にもたてなかった。

ヘルマー：いやいや、よく来てくれた。おお、シェリイとメリイもずいぶん大きくなったな。

メリイ：ヘルマーおじちゃん、おひさしゅう！

シェリイ：メリイ！ ” ヘルマー様 ” ――でしょう。

ヘルマー：いやいや、かまわないよ。私も娘が二人いるようで嬉しい。

メリイはいまでも――なんだったかな、芸事を磨いているのか？

メリイ：はい、いまは色々忙しいですけど、うち、星団一のお笑い芸人目指してますもん。

お姉ちゃんは相手にしてくれへんから最近では、ちび様を相方にスカウトしようかと思ってますねん。

ヘルマー：それはいい、ぜひ、誘ってやってくれ。

メリイ：はい！

ヘルマー：はっはっは――さて、ではモモさんを連れてきてもらえないかな。

シェリイ：わかりました。行きましょう、メリイ。

メリイ：ええ～、うちはまだ――

シェリイ：お二人は重要なお話があるのです。来なさい――

メリイ：あいたた、自分で歩くってば！

ヘルマー：気をつかわせて、すまなかったな。

ガイナン：いや――

ヘルマー：あまり芳しい報せではないが――近頃、U-TIC 残党の他にも不穏な動きがある。

ガイナン：――ああ。

ヘルマー：十四年前、ミルチア紛争が終結した際の講和条約は、当時の混乱の中では最善の道だったが――
誰もが諸手を上げて、賛同していたとは言えん。

その歪みが連邦内で、表面化しようとしている。

ローマン大尉の報告では、一部の勢力に武装蜂起の兆しがあるようだ。

第二ミルチア政府では警戒態勢を敷いているが、君たちも留意しておいてくれ。

なにしろ、ファウンデーションはいまや――

ゾハルエミュレーターと百式プロトタイプを懐に有する存在として、注目の的だからな。

シェリィ：――ガイナン様、ヘルマー様、モモ様をお連れしました。

ヘルマー：――百式プロトタイプ、か。

ガイナン：ありがとう、通してくれ。

モモ：初めてお目にかかります。百式観測器プロトタイプ――略称M.O.M.O.と申します。

内部データの一次調査、完了いたしました。

ヘルマー：――やはり、量産型よりもひときわ似ているのだな。

ガイナン：ああ、ミズラヒ博士の――まさしく忘れ形見だ。

ヘルマー：そうか――縁とは不可思議なものだ。

モモ：（この方、サクラ・ミズラヒをご存じだったのかしら――）

ヘルマー：数々の危難に直面し、ご苦労だった。これから君はU.M.N.管理センターで解析される事になる。

我々も出来うる限りのサポートを用意するつもりだ。心配せず、任務についてくれ。

モモ：はい、お気遣い、ありがとうございます。

ヘルマー：ニグレド――君に頼まねばならん仕事がある。

ガイナン：索敵、だな。

ヘルマー：――すまん。

ガイナン：お気遣いなく、元は内輪の責任だ。

――

ケイオス：モモちゃんと、もっと話しておかなくてよかったのかい？

Jr.：――ヘルマーのおっさんなら、まかせて心配はないからな。

それに――話す機会なら、これからいくらでもあるさ。

時間はたっぷりあるんだ、俺にも、モモにも――

ケイオス：そうだね。

Jr.： なんだか、腹が減ったな――ん？

おい、ケイオス！ あれ見ろよ！

ケイオス：モビィ・ディックカフェ？ なんだか、雰囲気あるね。

Jr.： こんな店ができてたなんて、知らなかったぜ。さ、入ってみよ！

モビィ・ディックカフェ

Jr.： おーっ、内装バッチリーピークオド号の雰囲気出てるじゃん！

ーお？

ケイオス： ーシオン？

シオン： ー――ふう、

ケイオスくんと Jr. くんーどうしたの、二人そろって？

Jr.： いや、腹減ったなあーと。

ケイオス： で、たまたまここにー

マスター： なに、お知り合い？

シオン： え、ええーまあ。

ケイオス： まあーってのは、ちょっと酷いんじゃないかなあ。

シオン： ーごめん、ちょっとね。動揺してたから。

ケイオス： 動揺ってー？

マスター： シオンちゃんの家は複雑なんですよーね。

シオン： はは、あははははー

Jr.： ？

ケイオス： ？

クーカイ・ファウンダーション 🏢

ガイナン： さて、とー

――――

さあ、坊やーどこにいる？

アルベド『ーニグレド？ ニグレドか？』

ガイナン： やあ。相変わらず、無駄に元気そうじゃないか。

アルベド『お前も相変わらず、口が達者だな。どうした、寂しくなったのか、ー味噌ッカス。』

ガイナン： なに、ちょっとした情報収集だ。もちろん、和平交渉に応じる余地は残してある。

アルベド『”和平交渉”と来たか。マッカートニーも言ってたっけなあ、”白黒仲良くしろ”ってさ。

ふはははははー俺は、おまえの正体を知ってるんだぜ。

” 処刑人 ” 。』

ガイナン： その役割は、とうに捨てた。

アルベド『 どうか？

ルベドの傍に張り付いて、職務遂行のチャンスをうかがってるんじゃないのか？

ルベドは俺が借りる――所詮、おまえは蚊帳の外さ。

せいぜい期待しているよ、おまえの活躍を。』

ガイナン： 待て、それは――

アルベド『 ぐああ――！

へへへ――怖い、怖い――

おまえは、昔からそういう奴だよなあ。穏やかな顔をして、死の牙を研いでいる。

ふふふ――ははは――ひゃっははははっ！ 』

ガイナン： ――やはり、どうあってもウ・ドゥと連結[リンク]するつもりか。

そして――Jr. を、ルベドを、どうするつもりだ。

アルベド『 ―――― 』

ガイナン： ―――― ふう、念話を断たれたか――

第二ミルチア

Jr.： うんまいっ！

ケイオス： なるほどね、エルザの中で言ってたルーツって、この店だったのか。

シオン： ふふ――バレたか。

あ、ところで――モモちゃんの方はもういいの？

ケイオス： 本走査はユリ・ミズラヒ博士が到着してからみたい。いまのところ、問題はないようだね。

Jr.： そゆこと――で、時間空いたからさ、せっかくなんで街に。

シオン： ――そう。

ケイオス： シオンの方は？ KOS-MOS、もう引き渡したの？

シオン： うん――

一応、アレンくん引継、頼んできた。状況によっては、しばらくかかるかもしれないけど。

Jr.： 向こうでなんかあったのか？ 浮かない顔してるぜ。

シオン：——まあ、いろいろと。それに、あの子とは長かったからいざ別れが迫るとそれなりに——ね。

Jr.：ふーん、そんなもんかねえ——

ケイオス：そう、たとえば——

秘蔵のカーレスの照準器[スコープ]を手放さなくてはならないとしたら——君はどう？

Jr.：あ、それはつらい！ 財布も心もめっちゃつらい！

ケイオス：でしょ。

シオン：もう——Jr. さんのコレクションと KOS-MOS を一緒にしないでくれる。

マスター：いらっしゃい！

シオン：————！

ジン：ご機嫌よう、マスター。

マスター：やあ、いらっしゃい。いやはや奇遇だね、ちょうどいま——

——って、アレ？

ジン：シオン——

シオン：ご、ご無沙汰——

ジン：ジンです、ジン・ウヅキー——よろしく。

ケイオス：こちらこそ。

（——————）

ジン：（——————）

そうですか、シオンの——うちの愚妹[ぐまい]がご迷惑をおかけしてませんか？

シオン：愚妹はないでしょ——

ケイオス：とんでもない、シオンさんには幾度も助けてもらいました。

ジン：——いやいや、別にこれの前だからって気をつかわれなくても、結構ですよ。

シオン：——兄さん！

ジン：おや、なんだか歓迎されてないみたいですねえ。

シオン：もう——そんなこと言ってないでしょ、私はただ——

ジン：——ただ、なんです？ まったく、連絡ぐらいくれれば、迎えに行ったのに。

シオン：い、忙しかったのよ。

それにここに降りたのだって、急の用事で仕方なく——

今夜中に、本社に戻る準備だってしなくちゃならないし——

Jr.： えーさっき、しばらくかかるってー

ーイテッ

シオン： ふふ、あはは、あはははなんでもないわ、なんでもー

Jr.： シオーン、脚、イターーもう、黙ってるかーらー

シオン： だ、だれかしらー

アレン『ーああ、主任、お疲れさまです！

えと、KOS-MOS なんですけど、三種装備用のコーディングに手間取ってるみたいです。

この感じだと、あと二、三日はかかりそうですね、ま、ボチボチのんびりって感じですが。

ーて、どうしたんですか、主任？ なんか落ち込んでません？』

シオン： ふー

ねえ、アレンくん。ひょっとして、これって新手の嫌がらせ？

アレン『は？？？』

シオン： なんでもないわ、涙が出るほど素晴らしいタイミングの報告ーありがと。

アレン『はあーあ、それで主ー』

ジン： ーなるほど、ボチボチのんびりーですか。

シオン： ー

ー

ー

ー一分かったわ。

行くわよ、帰ります。いいんでしょ、それで。

ジン： ええ、もちろん。そうだ、いかがですか？ お二人とも、これからうちに。

ここからそんなに遠くないですし。

Jr.： ーだって、どうするよ、ケイオス。

ケイオス： そんなー僕らがお邪魔したら、せっかくの兄妹水入らずー

シオン： （お願い、二人ともうちに来て、気づいて、お願いー）

ケイオス： ええとー

シオン： （お願いお願いお願いー）

ケイオス： そ、それじゃあ、お邪魔させていただきます。

お言葉に甘えてーちょっとだけー

シオン：しかたないな。気乗りしないけど、実家に行くわ。
街からはちょっと離れているけど、そう遠くはないしね。

—————

—————

————はあ、気が重い。